

小池辰雄記念図書室だより

2017, 4. 10. (金) NO. 36 千葉市若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

1. 小池辰雄誕生日記念会

石丸 厚子(都賀)

都賀の地に小池辰雄記念図書室が開室してから早6年を迎えました。

そして2月7日、都賀のオリーブ山教会で札幌キリスト召団として初めての小池辰雄誕生日記念会が行われました。

30名の小池先生ゆかりの方や、図書室利用者、読書会の参加者などで祝いの会がはじまりました。

実行委員長は水谷幹夫先生、メッセンジャーに裾野召団の松井康男さん、札幌召団の長野初美さん、後藤敏夫さん、木下肇さんと午前の部ではかなり迫真のメッセージが続きました。皆さんで乾杯をして、昼食です。バザールヴィタ提供のサンドイッチ、ローズマリーポテト、クッキー、珈琲、梨ジュース、ほうじ茶、ワインをいただきながらの楽しい一時となりました。

続いて午後からは小池信雄、牧子ご夫妻の小池先生にまつわるお話があり、お開きとなりました。

皆さんのメッセージを冊子にして文泉に編集して頂いたものがもうすぐ図書室に届きます
どうぞ皆さんお読みになってください。



2. 図書室の新しい顔

図書室に4名の新しい顔が登場しました。2階のギャラリーオアシスで2月に展示をされていた久保俊寛さんが書いて下さった似顔絵です。既に水谷先生に頂いていた2枚と、展示の合間

に図書室に来られ小池牧子さんに、「何か題材は？」とお聞きになって牧子さんの推薦によりさらに2枚を図書室に贈呈して下さいました。すべて図書室にゆかりのかたばかりです。

どうぞ見にいらしてくださいませ。



小池辰雄を読む会

●余市「無の神学」

2017年4月2日(日) 13:30~15:00

2017年5月7日(日) 13:30~15:00

余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:0135-23-9222(木下)

●札幌「無者キリスト」

2017年4月1日(土) 13:30~15:00

2017年5月6日(土) 13:30~15:00

札幌市南区川沿10条 3-10-5 札幌祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:011-571-2348(浅井)

●関西「無者キリスト」

2017年5月14日(日) 14:00~15:30

神戸市中央区磯上通り 4-1-12 神戸ハイブルハウス

*自由献金 *連絡先:079-588-5357(小牧)

●都賀「聖書の人ルター」

2017年4月15日(土) 10:00~12:00

2017年5月20日(土) 10:00~12:00

千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5F

*会費:1000円

*連絡先:043-235-3815(石丸)

*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

*予習不要・初心者歓迎

本図書室は献金で運営されています。

図書室便りは隔月発行です。

東大のガイスト

六〇歳退官最終講義を駒場へ行って聞いた記憶がある。初めて大学の教室で講義する父を見ながら、日曜の集会で黒板をつかって話すスタイルは、大学講義のスタイルなのだとわかった。長く教官をしていたから、どうしても日曜の聖書講話も講義のようになってしまうのだろう。時々、黙ってうつむいたり、目を閉じて天を仰いだりするのも集会のときとかわらず、おそらく祈っているのだろうが、学生はその沈黙の間、この先生は何を考えているのかと考えざるを得ない。やや長い沈黙のあと、「そういうわけだから……」と話が再開される。これも父の癖で、どういうわけだったのかしばしば不明である。学生から「ガイスト」(霊)というあだ名を賜っていたと聞くと、どうもドイツ語の教官といいながら集会の延長をしていた節がある。

小池辰雄編纂のドイツ語教科書を南江堂という出版社から何冊も刊行しているが、ルターの『キリスト者の自由』を始めすべてキリスト教関係の本を教科書につかっていたから、教室でどのように聖書の話に触れようが本業から大きく外れることはなかっただろう。

太平洋戦争後の東大は、内村鑑三の無教会の流れをくむ南原繁、矢内原忠雄といった学者が総長になっていた。無教会派の教授も多かったから、キリスト教自体にはさしたる違和感はなかったと思うが、「ガイスト」とあだ名が付いたところをみると、辰雄はどうも一般教養としてキリスト教を語ったとは思えない。つまり、昭和二五年の霊的体験した信仰上のコペルニクス的転回後のことだから、キリストの霊を実際に受ける話をしたことだろう。東大の教室での霊に関する小池の言動は、同門の矢内原忠雄から苦々しく思われていたに違いない。

このあたりから無教会派の友人との関係が消えていったので、もともと世間的人付き合いの苦手な小池辰雄の唯一の友人は集会の人ということになる。

私が河出書房新社の編集者になってから不思議に思ったのは、父の交友関係者に東大の先生がほとんどいないことであった。河出書房新社の顧問であり、吉祥寺に住んでいた高橋健二氏

は、東大独文科の二年先輩であり、ヘルマン・ヘッセの翻訳で有名だったが、父に聞くと、「知らん」という。ドイツ文学者でわが家に来た人は、カフカの研究者原田義人氏、リルケの研究者星野慎一氏くらいしか覚えていない。

つまり小池辰雄は、職場で全く世間のおつきあいというものをもたなかった。無理もない。「軽く一杯いきますか!」と声を掛けたくなるような人物ではなかったからだし、そういう文化は持ち合わせていなかった。

「叔父さん、正月くらいお酒出しなさいよ」

新年の挨拶に来た辰雄の甥は、来るたびにそうこぼした。小池家にはお酒を飲むという習慣が新年でさえもなかったのである。

東大の学生が集会に参加していたのは、昭和27年くらいまでで、例の「清瀬事件」以降はいなくなったと思う。「東大生は好きになれない」と言っていたから、私は大学受験のプレッシャーを感じないですんだが、実際、東大に入った高校の友人を家に連れてきたときには、あからさまにイヤな顔をして、「生意気なやつだ」というのである。小池辰雄が担任だったという西尾幹二氏、柳田邦男氏の著書には数行思い出が語られているから、学生から全く嫌われていたとは思わないが、東大にいい印象を持っていなかったようだ。

それでも、退官した翌日の夜、いつもは書斎にいた父が一人ぼつんと居間のこたつにすわっていた。それは老けた「ガイスト」のようにも見え、なんとなく元気づけなければならないと思った。出版社に就職を決めたばかりの私は、「出版という仕事につく」話を改まってしたが、人物往来社などという名前を聞いたことがなかったので、あまり元気づけにはならなかったように思う。



1964年2月 小池辰雄最終講義